

## 保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究 —実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に—

小島 千恵子

### 1. 問題と目的

子育てをめぐる社会状況は、常に変化している。1990年の「1.57」ショックから特にめまぐるしく変化し、今日まで様々な子育て政策が展開されている。そのたびに少子化解消のための子育て支援や保育所の待機児童の問題がクローズアップされ、『子育て支援』『待機児童』という言葉は共に市民権を得たと言えよう。

これらの問題と共に語られるのが、子どもを預かり保育する側の保育の質と保育者の資質と力量の向上である。その時代の保育ニーズに応えられる保育の質や保育者への一層高い専門的な資質が求められ、養成機関には強い期待が寄せられている(全国保育士養成協議会 専門委員会2012)。

このように保育者への期待が高まる社会の現状の中、保育者をめざす学生はというと、「少子化」渦中に生まれ育ち、きょうだいも少なく、乳幼児とふれ合う体験は少なかったことが予測され、乳幼児とのかかわりは保育・教育実習が初めてという学生が多い。保育者をめざした理由を聞くと、「子どもはかわいい」、「子どもが好き」という答えが多く、中学校などにおける職業体験や授業の中の「保育」体験で、少し乳幼児とふれ合ったことが思いの土台となっていたり、「とりあえず資格がとれるから」という安易な考えで入学してくる学生も少なくない。

学生は、子どもが好きだからそれを将来の職業にしたいという単純な意識で保育者になるために学び始めるが、忙しいカリキュラムに追われたり、専門科目を学んだりすることで、自分がイメージしていた大学生活と違うことに気づいたり、保育者になるのは厳しく、簡単なものではないということがわかり始めたりし、保育者をめざす意識にゆらぎが見え始める学生もいるようである。

さらに、保育・教育実習を経験すると、その意識は「保育者の仕事は思っていたよりも大変そう」、「子どもと遊んでいるだけではだめなんだ」、

「自分は保育者として一人前に働けるのか」などといったように、保育者のイメージが、自分が描いていたものとは違うことに気づき、自分の将来に不安を抱く学生が出てくる。学生にとって実習の経験は、将来の進路を変えてしまうほどの影響力があるようで、保育者への道はあきらめて、一般企業に就職を変更するケースもある。

学生は、保育者の資格を得るために専門知識を学ぶ一方で保育技術を身につけるために、保育現場に出て子どもとかかわりながら現職の保育者に直接指導を受ける。実習は、学生にとって子どもとかかわり、保育者の仕事を実際に見るよい機会であり、自分自身が目指すものを実感する絶好のチャンスであると推測されるが、この経験が保育職への意欲を失わさせるのはなぜだろうか。

学生の「保育者」への憧れと夢を持続させるためには、養成機関で何をどのように学ばせるとよいのか、実習という実践経験を養成課程の学びとして有効にするにはどのような指導が必要なのだろうかと考えた。

本研究は、「実践力のある保育者の資質の要素を探ること」を中心課題とし、保育所実習の直前、直後で保育に関する価値観に変化があるのか調査分析を試みた。学生の実習前後の態度や発言は、表向きにはたいした変化もなく、期待と不安が中心であるが、個々に話をすると、毎回の実習において、その評価や手応えがかなり違い、学生は実習を重ねる度に一喜一憂していることがわかった。今回の調査では、保育所実習前後での子どものイメージ、保育のイメージ、理想の保育者像について尋ね、実習前後で、それらの意識について、自己意識の変化に自覚があるのか、それがどのようなものなのか分析考察した。

### 2. 研究方法

#### (1) 調査対象者及び手続き

N市私立S大学教育学部保育・初等教育専修課程

87名。専修課程の2年次・3年次の保育所実習前後(2009年6月～2010年9月)に質問紙調査を行った(3年次は84名)。自己意識の変化の自覚については、質問紙調査2回に回答した学生の中から調査可能な29名を抽出して面接調査を行った。面接調査は、個別に20分間行った。

## (2) 質問紙

質問紙調査の内容は以下の通りである。回答は自由記述とした。

- ①子どもに対するイメージ・子どもとは何か(子ども観)。あなたが、子どもからイメージすることは何ですか。
- ②理想の子育て・どのように子どもを育てたいか(子育て観)。あなたはどのように子どもを育てたいですか。
- ③どのような保育がしたいか・どのように子どもとかかわりたいか(保育観)。あなたが保育者になったらどのような保育がしたいと思いますか。
- ④理想の保育者・どんな保育者になりたいか(保育者像)。あなたは将来どんな保育者になりたいですか。

面接調査は、面接前に質問紙に記入後、その回答に沿って行った。質問の内容は、「保育実習の前と後で、自分の保育に対する意識が変わったかどうか、自覚できたか」である。

## (3) 結果の分析

質問紙調査については、それぞれの質問項目の自由記述から、その回答である言葉や内容を抜き出して、KJ法を用いて分類し、分類ごとに言葉や内容の数を2年次、3年次の保育所実習前後で比較した。面接調査については、回答内容をそれぞれ詳細に読み取り、質問紙の項目も含めてその変化を整理して、意識の変化をタイプで分別した。

## 3. 研究の結果と考察

質問紙①～④の2年次と3年次の回答数はFig.1・Fig.2のとおりであった。2年次の実習の前後と3年次の実習の前後では、その項目の回答数に大きな差はなかった。2年次、3年次を比較してもその傾向に違いは見られなかった。

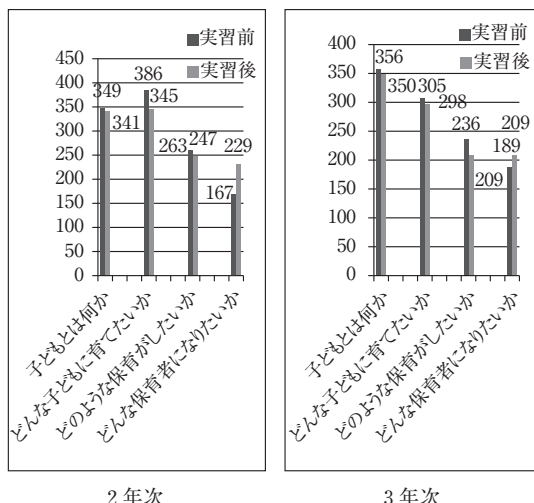


Fig.1 保育に関する意識の実習前後の比較(回答数)

全体の傾向に違いは見られなかったので、項目ごとにその内訳を見てみることにした。その結果は、Table 1～Table 2に示すとおりであった。

Table 1 保育に関する意識の内訳の比較2年次(回答数)

		実習前	実習後
子ども観	姿・態度	46	105
	内面	286	218
子育て観	姿・態度	281	289
	内面	105	56
保育観	子ども・親への支援	114	206
	自身の意識	149	41
保育者像	子ども・親との関わり	64	135
	自身の意識	103	94

Table 2 保育に関する意識の前後の比較3年次(回答数)

		実習前	実習後
子ども観	姿・態度	51	123
	内面	301	227
子育て観	姿・態度	263	80
	内面	42	209
保育観	子ども・親への支援	114	169
	自身の意識	120	40
保育者像	子ども・親との関わり	106	121
	自身の意識	83	88

①の子どもに対するイメージ(以下子ども観)については大きく、活発、元気などの子どもの姿、態度と、感情豊か、意欲があるなどの内面の育ち

の2つに分類された。質問紙②のどんな子どもに育てたいか(以下子育て観)については、自分を表現できる、外で元気に遊ばせるなどの子どもの姿や態度の育ち、優しい子どもに、好奇心のある子どもになどの内面の育ちの2つに分類された。質問紙③のどのような保育がしたいか(以下保育観)については、いろいろな経験をさせたい、親子関係がよくなる援助などの子ども・親への支援と、共に育ちたい、平等にかかわりたいなどの自身の意識2つに分類された。質問紙④のどんな保育者になりたいか(以下保育者像)については、子どもに信頼される、親の気持ちになって保育するなどの子ども・親とのかかわり方、子どもを愛する、いつも笑顔でなどの自身の意識に分類された。

次にその内訳について具体的にみていくことにする。

(1) 子どもに対するイメージ (子ども観)

子どもに対するイメージ (子ども観) の2年次と3年次の実習前後の比較はFig.2・Fig.3に示すとおりであった。

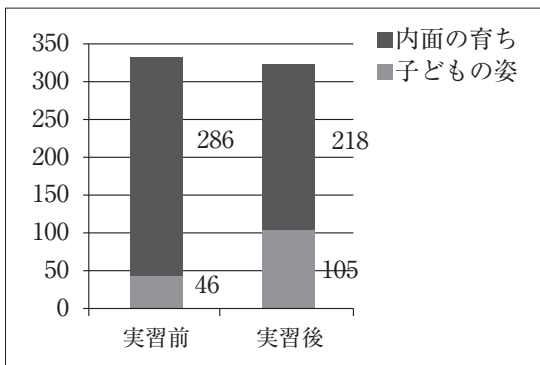


Fig.2 2年次 子どものイメージ (子ども観)

2年次では実習前には、子どもの内面についての回答が多かったが、実習後は子どもの姿に関する回答が多くなっていった。実際に子どもとかかわったことで、子どもは元気、活発などの具体的な回答が増えたことが推測された。これは3年次の実習でも同じ傾向を示し、3年次になると各項目の言葉の数が増え、内容が豊かになっていた。具体的には、周りからの影響が大きい、大きな可能性を持っている、危険予測ができない、みんな

違うなどであった。子どもの行動を観察したことによって、子どもに持つイメージが深くなっていく様子がうかがえた。子どもが好きという理由で保育者をめざしている学生が多いが、実習をすることで、「子どもが好き」から「子どもは〇〇である」といった専門的な意識に変わっていく様子がうかがえた。

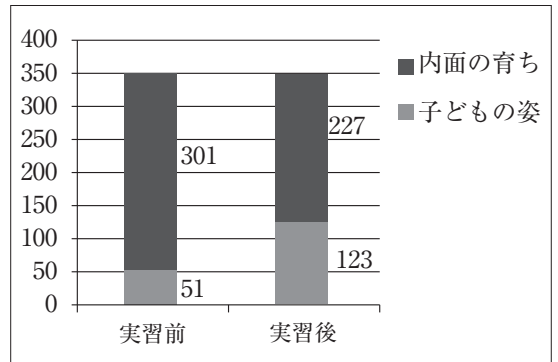


Fig.3 3年次 子どものイメージ (子ども観)

(2) どんな子どもに育てたいか (子育て観)

どんな子どもに育てたいか (子育て観) の2年次と3年次の比較は、Fig.4・Fig.5に示すとおりであった。

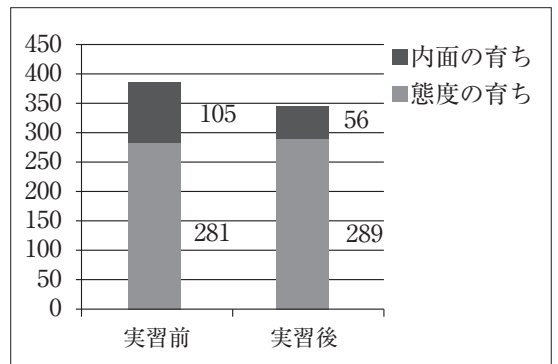


Fig.4 2年次 どんな子どもに育てたいか (子育て観)

2年次では、実習前後で、その内訳にあまり変わりはない。子どもの行動を観察したことで子どもの態度の育ちについての回答が若干増えていた。3年次では、実習後に違いが見られ、子どもの内面の育ちについての回答が多かった。具体的には、強い意志を持っている、自分の意思が伝

えられる、善悪の区別がつく、人の痛みがわかる、自分のことを大切にするなどであった。実習を重ねたことで（この実習までに施設実習を経験している）、子どもが表出する姿や態度ではなく、内面に目が向けられるようになったことがうかがえた。子どもとより深くかかわりが持てるようになったことで、子どもが表出する態度よりも、内面の育ちを期待する発言につながったことがうかがえた。①の項目の子ども観と同様に子どもに対してただ漠然と持っていたイメージが、実習で、子どもを深く見る経験をする中で、具体的に「こんな子どもがいい」「こんなふうに育てほしい」という意識に変わっていく様子が見られた。

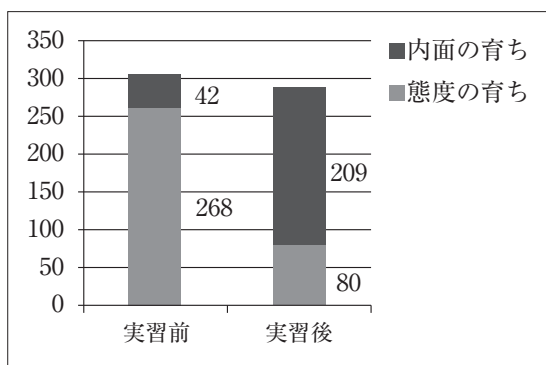


Fig.5 3年次 どんな子どもに育てたいか（子育て観）

### （3）どのように保育したいか（保育観）

どのような保育がしたいか（保育観）については、Fig.6・Fig.7に示すとおりであった。保育観については、2年次、3年次の回答に違いが見られなかった。自分がどんな保育がしたいか、子どもとどのようにかかわりたいかは、保育観を持つということは、保育するうえで重要なポイントである。具体的には、子どもの自立を促す、親子が安心できる、遊びの工夫ができる、子ども一人一人の個性を大切にするなどであった。

2年次、3年次で項目の内容について見ると、同様の回答でもより具体的になっていたり、その内容に深みが出ていたりするなど、回答数では比較できない質的な違いが見られた。実習の経験を重ねることで保育について深く考えていく様子が見られた。また、回答の内訳の内容がほぼ半分に分かれていたものが、子どもや親の支援について

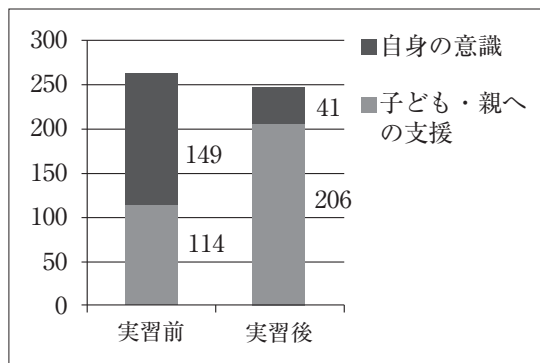


Fig.6 2年次 どんな保育がしたいか（保育観）

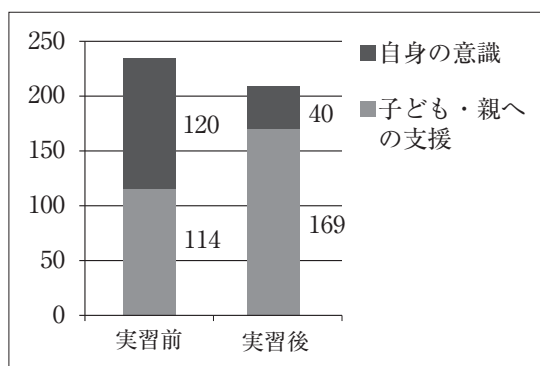


Fig.7 3年次 どんな保育がしたいか（保育観）

の回答が多くなっていった。実習を経験することで、保育者として子どもや親を支えるという意識が出てくる様子が推測された。また、「子どもと一緒に遊ぶという意識」から「保育者になって子どもを保育する」という意識に変わっていく様子が見られた。

### （4）どんな保育者になりたいか（保育者像）

どんな保育者になりたいか（保育者像）については、Fig.8・Fig.9に示すとおりであった。保育者像についても2年次、3年次で違いが見られなかった。自分がどんな保育者になりたいのか、保育者をめざした時から、保育者に対するイメージと憧れ、理想像を描いていたようであるが、実習先で出会った保育者や、指導をしてくれた保育者に憧れを抱き、「実習先の保育者になりたい」という具体的なイメージが湧き、保育者が身近な存在になるようである。保育者と子どものかかわりを、自分がイメージしていたもの

と「同じか、違うか」というフィルターを通して見て、学生は、実習で出会った保育者との出会いから、どんな保育者になりたいのかイメージしているようである。その基になるのが、保育者が子どもとどんなふうに関わっているのかということのようである。子どもと親にどんなふうにかかわりたいかということが意識され、回答につながったことが推測される。理想の保育者像の具体的回答は、子どもの気持ちを理解できる、親に信頼される、子どもに憧れられる、子どもと共に成長できる、子どもと全力でかかわる、いけないことを注意できる、物事を多面的に見ることができるなどであった。中には、こんなかかわり方はしたくないというものもあった。話を聴くと、実際に見たことが印象に残っていることがわかった。

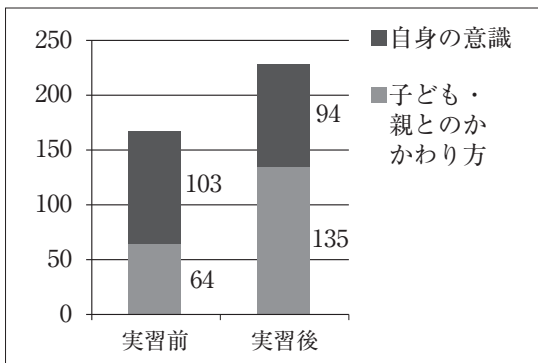


Fig.8 2年次 どんな保育者になりたいか (保育者像)

実習で出会う保育者によって、学生が持つ保育という仕事に対するイメージが大きく変わることがあると言っても過言ではないだろう。

本稿の冒頭でも述べたように学生は、実習を経験することで一喜一憂し、保育者をめざすことについてゆらぐことがある。一喜一憂する理由は、保育という仕事を実際に見て、描いていたイメージと違ったということはもちろんのこと、保育者との出会いであることは先に述べた。子ども観、子育て観はもちろんのこと、保育観は自分が保育される立場の時、どのようにかかわってもらっていたかということにつながるようである。保育は人が人に行うものである。当然、その保育者との出会いが学生に何らかの影響を及ぼすことがあるだろう。

学生が保育者になりたいと思ったきっかけが、「子どもが好き」ということの次に挙げる、「幼少期に出会った保育園の先生や幼稚園の先生のようにになりたい」ということがある。その時期はいつ頃か特定できないが、保育者との出会いが、保育者をめざす学生が持つ「保育」に関する意識、特に保育観や保育者像は、その基になっているのではないだろうか。

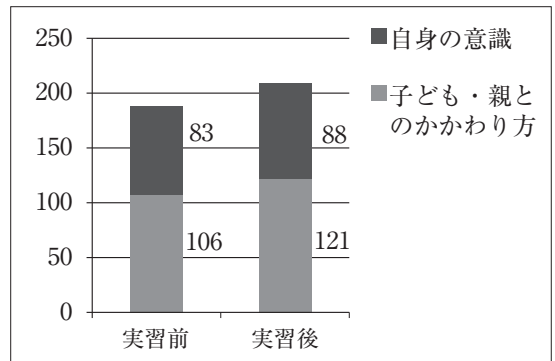


Fig.9 3年次 どんな保育者になりたいか (保育者像)

学生は、実習を経験することで保育に対して様々なイメージを描き、「保育者になる」という自分の将来像と照らし合わせて、意欲を深めたり、悩んだり、迷ったりしている。これらの自己意識の変化はいつ自覚するのだろうか。学生の意識の変化の自覚に着目して考えてみることにする。

#### (5) 自己意識の変化の自覚とタイプ

質問紙に2年次・3年次回答した学生中から、回答の内容が詳しく書かれていた29名に面接して、意識の変化の自覚について聞き取った(資料1参照)。その回答を整理したところ、Fig.10のようにAタイプ、Bタイプ、Cタイプに分けることができた。

具体的には、子どもと一緒に遊べばいいと軽く考えていたが、命を預かるという責任を感じ不安になった、子どもと生活する具体的な場面が頭に浮かぶ、責任感を持てるようになった、発達の勉強をする必要があることを自覚した、将来なりたい保育者像がはっきりしたなどのAタイプ。

子どもが可愛いと再確認した、子どもが集中して話を聞けるようにする、偏った見方をしない、

保育は保育所だけでなく、家庭支援も重要なことなどのBタイプ。

特に変わりはなく保育者をめざして学び始めた時と思いは一緒というCタイプであった。

Aタイプは、今自分が保育についてどのような考えを持っているか、整理しながら話していた学生が多く、自分の理想や保育者像が明確になったというタイプである。保育者になることをめざしてよかった、もっと勉強したいと意欲的になる学生であるが、その一方でいろいろわかり自覚したことから不安になり、自分が保育者として務まるだろうかと揺らぐ学生もいる。

Aタイプでは、意欲が高まって、もっと勉強したいという学生への援助、保育者にはなりたいた子どものことも理解できた、でも不安という学生への援助のあり方を考えねばならない。

Bタイプは、保育者になるための迷いはなく、今自分の課題は何か、何を勉強するとよいのかなど、具体的に考えているので、保育についてより具体的な援助を考える必要がある。

Cタイプは、前と変わらないという意識の自覚で、このタイプへの援助が一番難しいのではないかと考える。今、自分がどのような保育者をめざしているかさえわからない。具体的に何を援助するのか見つけることに時間がかかるタイプと言えよう。

実習指導は、学生数が多いことから個別対応できない現実がある。子ども理解に、指導計画の作成と、個別に指導を行う必要があることばかりである。学び環境の事情を考えてその対策を練った時に、上記のタイプでグループを作り、グループ別に指導するというのも一つの方法ではないかと考えた。しかし、実際に行うためには、そのタイプを特定するために、さらに学生に聞き取り調査をする必要があるだろう。もし、タイプの判別を間違えたとしたら、学生に効果的な指導ができないことはもとより、学生の思いを無視して指導することになる可能性もある。また、指導者の思いや考えを押し付けることになりかねないだろう。

ここでは、学生の自己意識の変化の自覚をタイプに分けることができたことに留め、効果的な実習指導を行うための方法を見つけるために、変化

のタイプをさらに細分化し、学生の気持ちに寄り添う指導法を見つけていきたいと考える。また、変化がなかったCタイプについては、学生の心が読み取れなかったことも考えられるので、「変化がないこと」について着目して学生の思いや気持ちの引き出し方を考えていきたい。

養成課程の学びの中で学生が不安や悩み、心の揺らぎを自分の力で乗り越えさせていくことが、指導法の重要な鍵となるだろう。何の自己意識の変化もなく保育者になり、保育の現場に立って悩みを抱えた時、乗り越えようとはせずに保育者を辞める選択をする学生もいるだろうが、できれば保育者になるために学んでいるうちに、「保育」について考え、葛藤する時間をつくっていくことも指導の一つにしたいと考える。そして、そのことが、保育現場に出た時に自分で辛さを乗り越えて、自分のやりたい保育をしながら、保育者として働き続けることにつながっていくのではないかと考えるのである。

Aタイプ	1.自分の理想の変化の自覚 2.自分の理想の明確化 3.保育者になることへの不安 4.保育者になることへの自信
Bタイプ	1.子どもの観方・理解の仕方 2.保育の具体的な方法 3.環境構成の方法 4.子どもとのかかわり方
Cタイプ	変化なし

Fig.10 保育に関する意識の変化のタイプと意識の自覚

#### 4. まとめと今後の課題

今日、保育が多様になり、保育現場では即戦力が求められている現実がある。養成の中で「実践力のある保育者」の基礎づくりは必修であろう。

「保育者になるという自覚を持つこと」ということも保育者資質向上のための大きな要素であり、保育者をめざす学生は、未熟ながらも保育の資質を向上させるために日々精進することが必要であろう。津守(1997)は、「保育の地平」中の第5章で、保育者は、子どもと深くかかわろうと思って傍らにおり、子どもとかわるたびに自分を新しくする。保育者は前向きにかかわりを継続し、新

しい関係を創造する。それぞれの子どものあるがままを認め、そのあるがままにかかわる」と述べている。子どものあるがままにかかわるためには、保育者の保育に対する自覚が必要であり、その信念が子どもにも伝わるのではないかと考える。

保育者をめざし、保育養成課程で学ぶことを決めた時から、様々な葛藤を味わいながらも、保育者になる覚悟を決めなければならないと考える。必修単位である実習を重ねる中で、将来選択しようとしている「保育者」という職業が自分にとって適切か不適切かという葛藤はあるのは当然のことであり、それがなければ、子どもの傍らに立ってあるがままの子どもと向かうことは難しいことである。

理想の保育者像を持ち、そうなった自分を想像し、学内での学びや、実習での学びを重ねていくことが、保育者への第一歩であると考え。本校は短期大学であるため、その学びは2年間と短い。その大半が「実習」である。社会の中に出て学んでくることの意義を十分に理解させ、自分が今、「保育」について何を考え、どのような「保育観」を持っているのか、実習指導の中で自覚させながら、実践的な技術を習得させることが今後の実習前と後の指導のポイントになるだろう。

また、2012年の全国保育士養成協議会の「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査」の報告の中で、保育士養成に求められる「柔軟な専門性」観について報告された。保育というのは、生活や遊びをとおして行われるため、保育士養成には、多様な専門分野間の「協働」が必要であり、教員がそれぞれの専門分野を大切に、各自が自らの分野に対して裾野の広い柔軟性を持つことが保育士養成の質の向上につながるのではないかと提案された。

学生の「保育」に対する意識を自覚し、向上させるためには、保育実習はもちろんのこと、実習

という画一的な体験だけではなく、総合演習の時間を利用しての社会との交流、ボランティア体験などの社会貢献など、2年という短い時間を有効に使った柔軟性をもった学びをさせ、失敗も含めて資質向上のための葛藤をさせていきたいと考える。今後は、実習指導を効果的に行うために、学生の実態把握を続け、「学生自らが自覚して学ぶ」ことができるような学習指導の指導法を考えていきたい。

## 引用・参考文献一覧

- 阿部明子(2010) 教育・保育実習総論(第3版) 萌文書林  
保育実習指導のミニマムスタンダード 全国保育士養成協議会編(2007) 北大路書房  
保育士養成資料集第56号(2010) 全国保育士養成協議会  
松永しのぶ、坪井寿子、田中奈緒子、伊藤嘉奈子(2002) 保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響 鎌倉女子大学紀要第9号 pp23-33  
鯨岡 峻(2010) 保育・主体として育てる営み ミネルヴァ書房  
大宮勇雄(2006) 保育者の質を高める ひとなる書房  
津守 真(1997) 保育者の地平 ミネルヴァ書房  
高濱裕子(2001) 保育者としての成長プロセス 風間書房

【付記】本稿は、日本発達心理学会第20回大会(発表論文集p300) 保育者をめざす学生の「保育」に関する意識の変化-実習の直前直後の比較を通して-と、日本保育学会第65回大会(発表論文集p587) 保育者をめざす学生の「保育」に関する意識-実習後の自己意識の自覚の変化を中心に-の2点を加筆修正してまとめたものである。

保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究

自己意識の自覚の経過

(資料1)

	子ども観	子育て観	保育観	保育者観	自己意識の変化
1	正直→気を引く→よく遊ぶ子→正直	生活習慣→我慢させない→優しい	外遊び→ルールや善意伝える→子どもの気持ちを考える→経験ができる環境	叱れる・笑顔→表情豊か→ゆとりがる→善悪の判断・笑顔	命を預かるという責任・子どもの観察の重要性
2	無邪気・不思議→可能性を秘める→大人の気づかぬ所に気づく・指摘	思いやり・元気→自分の意志・健康・優しい・思いやり	大人の都合で左右されない→個性を伸ばす→可能性を伸ばす→遊びの展開	判断力・信頼→信頼→笑顔・話がわかる→感情の共感	めんどくさい→自分の力を出し切る・楽しい
3	自己主張→自由→元気→想像力豊か	健康・好奇心旺盛→健康・のびのび→遊びの天才→元気	たくさん経験・子どもの気持ちわかる→健康第一→自然一体	よく聞き、よく見る→視野広い・臨機応変→健康	具体的な場面が浮かぶ 子どもは可愛いことを再確認
4	遊ぶことが好き→元気な子	コミュニケーション→元気な子ども思いやりのある子ども→	子どもがやりたいと思うことを尊重する→一人ひとりの応答性を大切に→自分も子どもも楽しめる→子どもの遊びを広げる	子どもに好かれる→子どもと一生懸命遊ぶ→子どもに好かれる→子どもを理解する	固定観念をなくす
5	素直可愛い→いろいろなことに興味を持つ	何事にも一生懸命・仲間を大切に→思いやりのある優しい子	好きなことをやらせてあげる→子どもの目線に立つ→一緒になって楽しむ	記憶に残る→信頼させる	自分も子どもと楽しむこと
6	人を和ませる・わがままが言える	人の痛みがわかる	メリハリがある→平等・優しい→気持ちをしっかり受けとめる	子どもに好かれる→子どもと一生懸命遊ぶ→子どもに好かれる	こういう保育がしたいという気持ちが持てるようになった一方で疲れて向いていないと
7	無邪気・自分を見て欲しい→元気に走り回る→素直	いろいろなことに挑戦できる→のびのびと遊べる・素直→いろいろなことに取り組める冒険心がある	よいところを引き出す→子どもの気持ちを受けとめる事ができる→みんなで助け合える	コミュニケーションがとれる→いろいろな遊びを提供できる	保育の理想が湧いてきた
8	周りを優しい気持ちにしてくれる→予想外のことをする・構って欲しいと思う→素直	元気・感情豊か→向上心を持つ・元気・豊かな体験・たくさん食べる→素直→何にでも興味を持つ・周りのことを考える	子どもを理解する・一緒に楽しむ→いろいろな角度から物事をみる→一人ひとりと向き	信頼される→子ども・保護者の立場に立って考える→けじめがある→一人ひとりと向きあう	子どもは好き勝手に動くことを痛感。全体見ることを知った
9	好奇心旺盛→素直→親から離れたがらない	素直・元気→優しい・思いやりがある→一生懸命取り組む→素直	一人ひとりを理解→気持ちを受け入れられる	笑顔・明るい→子どもと一生懸命に楽しめる→期待に応えられる→遊びの幅を広げる・子どもに慕われる	責任感が持てるようになった 発達を勉強する必要がある
10	いろいろな考え・感情を秘めている→素直→思うがままに遊ぶ→発想豊か	愛情を注ぐ→自分の要求を主張できる→思いやり・強い心を育てる→自分で考える力を持つ	子どもの気持ちを第一に感じ取れる→考える力を育てる→発達を支える→好奇心のまま遊べる	子どもの気持ちを感じ取れる→心から安心できる→心に寄り添い具体的に援助できる	偏った見方をしていた・考え方で保育が違う・子どもの姿も変わる
11	笑顔やしぐさが可愛い→素直→素直→感情豊か	基本的な生活習慣を身につけて欲しい→共感できる子→元気・思いやり→笑顔・元気	安全・いろいろな遊び・よいところを発見 安全・よいところを発見→長所・短所を認める	一緒に楽しめる→信頼関係→メリハリ→共感→子どもの話を聞く→笑顔	静かな子に目を向ける必要性を感じる 子どもが集中して話が聞けるように工夫する



12	素直→純粹→人が好き →よく笑う→	明るくはつらつとして いる→思いやり→共感 →健康→優しい・健康	保護者と二人三脚・平等 →共に楽しめる 温かい・好奇心をみたく す→自然・クリエイト	叱っても好かれる→お 母さんの→公平で優し い・知的指導力	将来なりたい保育者 像がはっきりした
13	日々成長→愛情を受け ている→元気・素直 遊びに夢中	元気・健康→優しい→ 感情豊か	母親のような愛情→ 個々を受けとめる→安 心できる環境→自由・ 意見を尊重→安心感・ 個々を受けとめる	責任感→信頼関係→安 心できる→温かい心で 受けとめる	
14	正直→成長が早い→素 直・まっすぐ可能性→ 走り回る・いろいろな ことに興味→探索行動	素直で温かい・一生懸 命→温かい・強い意志・ 人を大切に→素直・痛 みがわかる	命の大切さ→自由での びのび→行動活かせる →共に楽しむ→子ども を尊重する→共感	子どもと同じ気持ち→ 信念がある→優しく温 かく援助→遊びが豊か	何かしてあげよう～ 見守ろう 保育所だけでなく家 庭含めて保育する
15	目が離せない・天使→ 笑顔・元気・太陽のよ うな存在→すぐ泣く・ 思いっきり遊ぶ→いろ いろに興味を持つ	人の気持ちがわかる→ よく寝てよく遊ぶ→思 いっきり遊ぶ→自分の 意志・思いっきり	外遊び・子どもの気持 ち尊重→子どもの発 達や状況を見極める	きちんと叱り・説明で きる→優しく見守れる 健康で元気いっぱい→ 安全基地・思い切り遊 べる→すべてに信頼さ れる・アクティブ	笑顔はほめられた が、きちんと叱れる か 不安・保育者になる ことを悩みだした
16	素直・笑顔が好き→元 気	好奇心旺盛でのびのび →思いやり・自分の気 持ちをしっかりと言える →元気・感情豊か	一人ひとりの欲求を満 たす・親と二人三脚で 子どもを見守る→一人 ひとりに応じた援助	子どもの立場になって 考えられる→子どもか ら信頼される→先を見 据えた→親子に信頼さ れる	保育者になりたい気 持ちは強くなった
17	大人の働きかけでわか る・純粹→	健康・愛情たっぷり に育てる→思いやり 好きなことをのびのび と→感情豊かに他人を 思いやれる	親子関係が少しでも良 いものになる→一生懸 命に子どもと遊び・受 けとめる→一人ひとり を把握→人的・物的環 境整備	子どものことが一番→ 親子としっかりかかわ る→オールマイティ→ 一人ひとりを受けとめ る	保育士への希望が薄 れていたが幼稚園の 実習がよくまた希望 が湧いてきた
18	思うがまま・笑顔→元 気・好奇心旺盛→友だ ちに優しくできる	のびのび・健康→思 いっきり遊べる→	親からも信頼される・ メリハリがある→自分 も楽しい・子どものこ と第一→粹にはめない しつけはしっかり→豊 かな心がある	笑顔が素敵・親や子ど もに頼りにされる→	自分の計画とおりに はいかない
19	純粹・不安定→元気・ 素直→興味を示す	元気でのびのび→愛さ れていると感じさせる →自分の感情に素直→ 優しさ・あきらめない	いろいろなことを経験 させる→子どもに共感 し気持ちに沿う→自分 勝手ではなく自由	子どもの気持ちに沿う →信頼される→メリハ リ	子どもを主役に、周 りを見る
20	愛情が必要→真っ白→ 無邪気→感性豊か	正直・誠実→意志があ る→人の痛みがわか る・挫折にも立ち向か う→自分・人を大好き	五感を育てる→愛情 いっぱい→興味関心を 育て自由に→その子に あった保育→信頼関係	十分な愛情を注ぐ→長 所を理解できる→信頼 される	挑戦したい気持ちが 出てきた。保育士の 嫌だと思ふ保育を見 て、意欲が出てきた
21	笑顔・無邪気→環境に 大きく左右される→感 情豊か→好奇心旺盛→ 元気いっぱい	思いやりがある→素直 ・夢に向かって頑張り る・人を大切にできる →元気・遊ぶことが大 好き・気持ちを伝える	遊びを中心にする→子 どもに寄り添って→表 現活動をたくさん取り 入れる→健康	共感できる→頼りにさ れる→状況・環境に合 わせて・子ども目線→ 優しい・笑顔 子どもの気持ちを理解	
22	周りを明るくする・何 にでも興味を持つ→元 気・笑顔・周りの影響 を受ける・走る 回る	笑顔・元気・思いやり →人とかかわりを大 切にできる→興味関心 持つ→たくさん経験も つ	保育所は楽しいところ と感じる→長所を見つ けることができる→安 心→一緒に遊ぶ→笑顔 いっぱいになる・チャ レンジ・元気	安心できる→共感→子 どもに気持ちを受けと める	してあげなくちゃと いう気持ちが強いこ とがわかった・一人 ひとりを見る

保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究

23	素直・元気	健康・元気いっぱい→メリハリをもった明るい子・好奇心旺盛・何にでもチャレンジ	子どもの主張を大切に→子ども目線・信頼関係→自由に(わきまえを持って)気持ちを理解	信頼関係を築ける→子どもを愛せる→オーラのある保育者・子どもの目線→子どもを不安にさせない	理想が具体的にはつきりしてきた
24	純粹・素直・表現力豊か・好奇心旺盛→日々変化自分の世界・危険予知ができな	自分の考えを持っている・人を信頼・目標がある・人の気持ちがわかる→善悪の判断	一人ひとりの個性を尊重・楽しく遊ぶ→日々新しい発見・信頼される・毎日楽しく遊ぶ→柔軟性のある心で接する	臨機応変・メリハリのある→楽しく過ごせる→全体・個々を見られる→引き出し多い	理想が具体的にはつきりしてきた
25	素直・正直・不思議→一途・やんちゃ→感情豊か・忘れない→元気・外が好き→何でも信じる	前向き・元気・思いやり優しい・自主的・長所を生かす→何でも挑戦・何でも話せる→成長できる→	親身に信頼させる→楽しいと感じられる 一人ひとりに愛情を伝える→やりたい事につき合う	頼られる→第二のお母さん→最強の理解者→子ども目線で感覚がわかる	理想を掲げ過ぎてパニック、子どもと子どもの橋渡しをすること、大人の価値観・プラス思考
26	素直・感情豊か・失敗を繰り返して育つ→大人に気づかない優しさ→素直・好奇心旺盛→様々なことに興味を持つ	人の痛みがわかる・自分の考えを持つ→感情豊か・いろいろな経験→思いやり・優しさ	善悪を伝える・興味を持ったことができる→メリハリのある→安心感がある	安心できる存在→笑顔で合える・信頼関係→感受性豊か・引出をたくさん持っている	感受性豊かになりたいと今まで感じなかった。一人ひとりを見ていくことの大切さが
27	素直・興味を持って集中→見て欲しい気持ちが強い→思い切り遊ぶ→	のびのび・興味を持ったことをやらせたい→素直・のびのび・自己主張大切に→元気・思いやり・思い切り楽しむ	子どもの気持ちがわかる→共感・安心できる環境をつくる→一人ひとりにあった援助	子どもの立場になって考えられる→安心感を与えられる・子どもの成長を見守る→個々にあった援助	健康管理が必要
28	笑顔・よく遊ぶ・元気・自由・援助が必要→そのこにしかないものがある→素直・無邪気・元気	相手のことがわかる・わんぱく・のびのび→自由にのびのびと→考えようとする・挨拶・人の気持ちがわかる→環境を通す	一人ひとりに合わせる・笑顔→子どもと一緒に成長できる→命の大切さを学ぶ→やりたい気持ちを引き出せる→人とふれあう	可能性を引き出す・子どもの気持ちに寄り添う→リーダー・サポーター・信頼関係・子どもの気持ちを大切に	理想が具体的にはつきりしてきた・めざしていくのが見えてきた
29	好奇心旺盛・素直・失敗を繰り返して学ぶ→元気・周りの大人を信じている→自分中心で考えることが多い	優しい・考えをしっかりと持っている・素直・健康→気持ちを伝えられる・興味を持っていることに取り組む→自分を認められる	笑顔で毎日過ごす・挑戦できる→一人ひとりにあった保育→一緒に楽しめる・興味が持てる環境→個性を大切に	いつも笑顔で向き合っている→信頼できる子どもの気持ちを受けとめられる→リーダー・引出がたくさんある	不安がいっぱいだったが、自信が出てきた 自分の考えをすぐに答えられる

## Research on the consciousness of "childcare" of the student who aims at a child-care worker

—At a center [consciousness / of change of the sense of self before and behind training]—

Kojima, Chieko\*

子育てをめぐる社会状況は、常に変化している。1990年の「1. 57」ショックから特にめまぐるしく変化し、今日まで様々な子育て政策が展開されている。そのたびに少子化解消のための子育て支援や保育所の待機児童の問題がクローズアップされ、『子育て支援』『待機児童』という言葉は共に市民権を得たと言えよう。

これらの問題と共に語られるのが、子どもを預かり保育する側の保育の質と保育者の資質と力量の向上である。その時代の保育ニーズに応えられる保育の質や保育者への一層高い専門的な資質が求められ、養成機関には強い期待が寄せられている。学生は、保育者の資格を得るために専門知識を学ぶ一方で保育技術を身につけるために、保育現場に出て子どもとかかわりながら現職の保育者に直接指導を受ける。

実習は学生にとって、子どもとかかわり、保育者の仕事を実際に見るよい機会であり、自分自身が目指すものを実感する絶好のチャンスであると推測されるが、この実習経験で学生の「保育者になりたい」という気持ちに変化が起こることが実習指導の中で見えてくる。この自己意識の変化はどのようなものなのだろうか。本研究では、有効な実習指導のあり方を中心課題として、実習前後の学生の「保育」に関する意識（子ども観、子育て観、保育観、理想の保育者像）の自己意識の変化に着目して、学生一人一人の実習が有意義になるための実習指導のあり方を探りたいと考えた。

キーワード：学生の意識、意識の変化、学生の実習、実習指導、保育者の専門性